つくば市の地形とまちの変化

つくば市立春日小学校
5年3組　高見　陽菜

調べた動機

2020年に開催される東京オリンピックの会場建設や交通網の整備のニュースを見て、1985年に開かれたつくば科学万博会場のあと地（写真①）や、つくば市の土地の利用と道路の整備について、明治から平成の地図を使って、まちがどのように変化してきたかを調べました。また、現在の地形図を使って、つくば市の地形の特徴と土地の利用のされ方について、まとめました。

写真①

万博記念公園

写真⑤

通学路の途中の坂

地形と土地の利用

25,000分の1地形図の「上郷」と「谷田部」をつなげ、5mごとの等高線を記入し、田に色をつけた。（右下図）

- つくば市は東側の桜川と西側の小貝川にはさまれた、標高20～35mの台地（常総台地）の上に広がっている。
  両方の川にそって田が広がっている。また、田の周辺からゆるやかな上り坂になっていて、土地がだんだんと高くなっていることが分かった。（写真②の東側と写真③の西側）
- 南北に大小何本も川が流れていて、東西に移動すると、標高が低い川の部分と標高の高い台地の部分がくり返し現われる。（谷田部付近 写真④）
  私の通学路の途中にある坂も、川から台地へ上がっていくところにあたる。（写真⑤）
  つくば市は関東平野にあるので、土地が平らであると思っていたけれど、等高線を色分けしたり、現地へ行って自分の目で確認すると、想像以上に高低差があることが分かった。
- 川の周辺の標高20m以下の土地は、大部分が田になっていて、川と川の間の台地は畑や林が多く、道路の近くに住宅や店が集中していることが分かった。川が台風などの影響ではん濫することをおそれて昔から高い場所を選んで家を建てたため、このような分布になっていると思う。また台地の部分は、水をたくさん使う田には向いていないので、主に畑として利用されてきたと考えられる。（写真⑥）
  現在、台地の部分に日本を代表する多くの研究機関や工場が建ち、広くて平らな土地は、工業団地として活用されていることが分かった。（写真⑦）

写真⑥

川の周辺の田

台地にある畑

まちの変化

つくば市の明治、昭和、平成の地図を見比べて、どのような変化があるのか観察した。特に道路は各地図の主な道路をとう明のシートに写しとり、他の地図に重ねてルートと変化を見やすくした。（左下図）
重ねる時の目印として、「苅間辻」の十字交差点を利用した。（現在でも石の道標が建てられている。写真⑧）

- 明治には、「柳門（くぬぎ）」や「松（まつ）」の林が大きく広がっていて、その間にところどころ人が集まって住む村や畑があった。（地図には地図記号ではなく、「柳」「松」「畑」など、漢字でかかれていた。）主な道路は村と村をつなぐようにつくられ、その他は村の中に細い道があるだけだった。
- 昭和35年ごろ（筑波学園都市として開発が始まる前）は、主な道路の一部が広げられたりしているが、人が住むはん囲はそれほど広がっていない。
- 平成7年ごろには、東大通りや西大通りなどの4車線で歩道も広い道路がつくられていて、昔からある道路も車が走りやすいように整備されている。また、柳や松などの林の面積が減って、住宅やマンション、大学や多くの研究機関がつくられている。

調べた感想

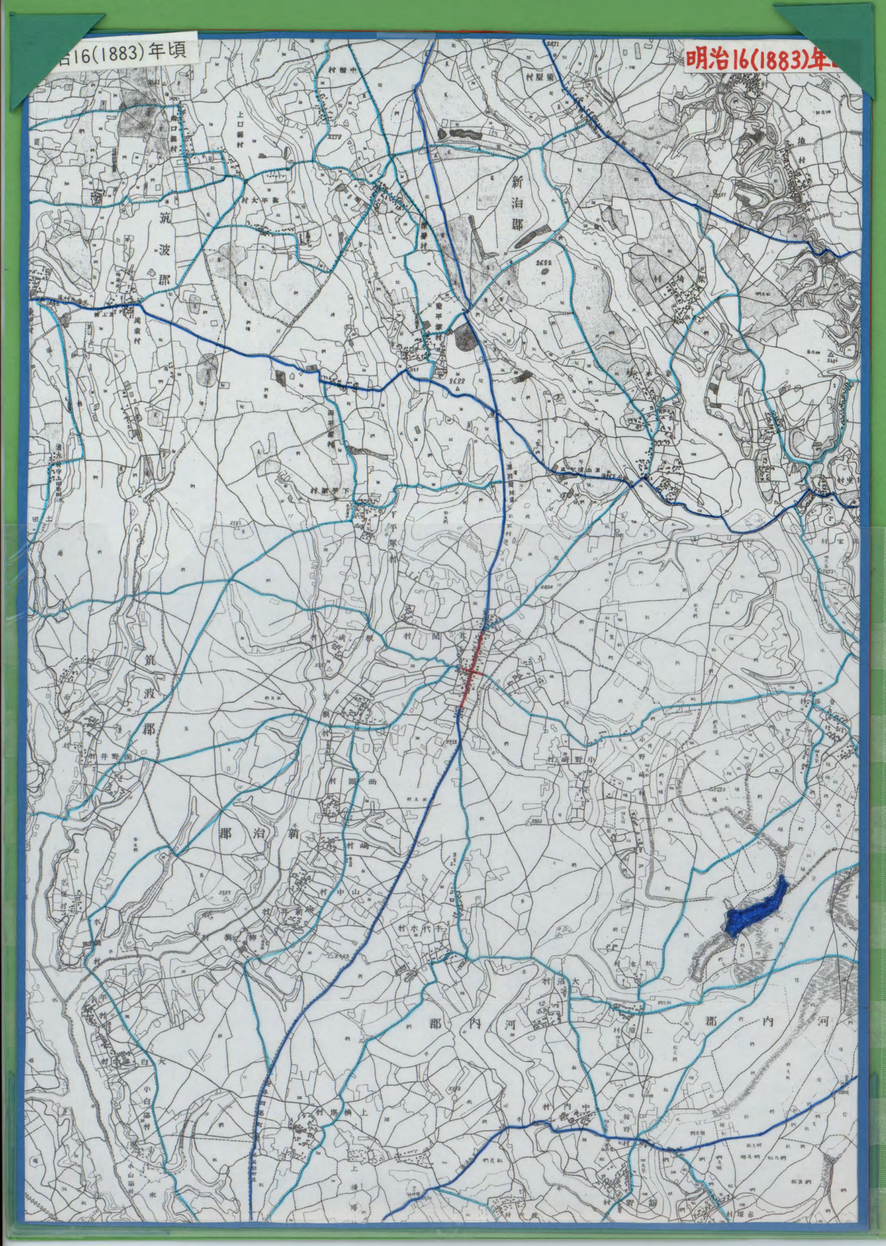
つくば市は、土地のゆるやかな高低をいかして、昔から広大な田畑がありました。科学万博をきっかけに、豊かな自然の中に人に役立つ研究機関や、生活に便利な店ができて、みんながくらしやすいまちになってよかったと思います。

「苅間辻」南北方向

写真⑧「苅間辻」道標

「苅間辻」東西方向

明治：村の中の道（下平塚）

昭和：集落の中心の道（上郷地区）

平成：西大通り